

研究プロデュースゼミ 企画書

統括:上田倫久

●問題意識

2001年に文科省によって行われた調査により、研究におけるAttentive Public(AP)は4%にすぎず、Interested Public(IP)でさえ23%に留まり、大半がResidual Public(RP)であるという事実が明らかになった。RPは予算削減に無関心であったり、研究室へ寄付するという意識自体を持っていなかったりするため、3.11以降研究に対する予算が削減されている中で、世論の共感をあまり得ていない研究そのものが廃れていく可能性もある。しかし、RPであっても「研究内容のことをよく知らずに研究を毛嫌いしている」、いわば「研究の食わず嫌いをしている」だけであると統括は考える。「食わず嫌い」を治すことができれば、RPはIPにもAPにもなり、上に挙げた問題は解決に向かうはずである。

●このゼミの視点

統括は「どんな人にも好きな、或いは興味を持てる研究分野が必ずある」と信じている。RPはその分野を知らないために研究に関心を持ってないだけで、それを見つければIPもしくはAPに変わると信じている。そこで、その分野に気付かせるための手段を「アウトリーチ活動」に見出す。そして、RPに届かせるために、より多くの研究分野での活発なアウトリーチ、より興味関心を呼びやすいアウトリーチの二つが必要であると考えます。

まず、前者を達成するため、今回のゼミで呼ぶ学生は「どの研究分野にも進む可能性を持つ駒場生」に絞る。時間的余裕のある駒場の時期にアウトリーチ活動を体感し、それについての知識・関心を持たせることで、将来さまざまな分野において「RPにまで届くアウトリーチ」の意識を持った研究者が増えるからである。次に、後者を達成するため、今回のゼミでは「研究×○○」という、「研究と何か別のものをコラボレートさせる」観点から考えていく。例えば、アートであったり、音楽であったり、マンガであったり、などである。このようなコラボを実現させることで、○○には興味のあるRPへアウトリーチを届かせることができると考えるからである。

●ターゲット

アウトリーチ活動の知識・関心のない研究者志望の駒場生(文理は問わない)

●ゴール

「研究食わず嫌い」な人を減らすため、より効果的なアウトリーチの方法を模索し続ける研究者志望の学生

●コンテンツについて

ターゲットの学生には①知識の吸収・問題意識の共感・実践例に触れる、②考え方の共有・実践のための構想、③実践、の3過程を踏んでもらう予定である。

①プレゼミ(12月3日)

統括の問題意識とアウトリーチ活動の意義について説明した後で、自分の興味分野とは違う研究分野(文系学生に理系の研究内容等)のアウトリーチを受け、その意義・可能性を実感させる。

②第1回企画(2月中旬を予定)

ここでは「研究×○○」という観点からRPに届くアウトリーチについて、学生が卒業生の方とともに考える。ここで考える案は実践することを目標とし、その先頭を切って研究プロデュースゼミメンバーが行動に移すことで参加学生に実行していくこ

とを促す。

③第2回企画(遅くとも来年の5月までを予定)

第1回企画で考えた案を実践する。